

## 指導行政のポイント

### 小学校の“英語教育”

菱村 幸彦

中央教育審議会で審議中の次期教育課程の改訂では、総合学習の見直し、国語教育の充実、理数科教育の改善と並んで小学校における英語教育が課題となっている。

さる10月26日に取りまとめられた中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」は、小学校の英語教育のあり方について「グローバル社会に対応し、小学校段階における英語教育を充実する必要がある。具体的な実施方法については専門的な検討が必要である」と提言している。

#### 国語教育か英語教育か

この答申は、教科として教えるかどうかは別として、小学校において何らかの方法で英語教育を導入する方向性を示している。しかし、いざ実際に実施するとすると、クリアすべき課題が多い。目下、中教審の教育課程部会で論議を重ねているが、問題点は次の3点にあるようだ。

第1は、“国語か英語か”である。つまり、いま小学校で重要なのは英語教育なのか国語教育なのか、という議論である。国語教育を重視する立場からは、小学校ではナショナル・ミニマムとして日本語のコミュニケーション能力を育成することこそが大切であり、ただでさえ授業時数が足りないなかで、なぜ英語を必修化しなければならないのかという疑問が出ている。

一方、英語教育を推進する立場からは、フランスやドイツでは小学校段階から外国語教育を実施しているし、とくに最近、韓国と中国で小学校から英語教育を必修としたことを挙げ、日本のみ遅れをとることはできないと、小学校における英語教育の重要性を強調している。

また、国語教育が重要としても、国語教育と英語教育は、言語教育としての共通の理念・目標に立つことで、小学校の段階で相乗効果が期待できると説

いている。

#### 英語教育の2つの考え方

第2は、“スキルか国際理解か”である。小学校における英語教育には2つの考え方がある。

1つは、スキルを重視する考え方。小学生は音声やリズムを柔軟に受けとめるのに適していることから、小学校では、英語固有の音声に慣れさせ、正しく聞き取って発音させ、基本的な表現を暗唱するなど音声を中心とした英語のコミュニケーション活動を通して、スキル面を中心に英語力の向上を図ろうとする考え方である。

もう1つは、国際理解を重視する考え方。英語を通じて言語や文化に対する理解を深めるとともに、ALT (Assistant language teacher) や留学生等の外国人との交流を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、国際理解を深めることを重視する考え方である。

いずれの考え方をとるにしても、小学校で英語教育を行う場合、中学・高校における英語教育との接続をどうするかが課題となる。単に中学校の英語のやさしいものを小学校に持ってくるだけなら意味はない。小・中・高校の英語教育を通して、ほんとうに使える英語になっていくかが重要である。

第3は、条件整備である。小学校には英語教育の専門家はいない。そうしたなかで、小学校で英語をいったい誰が教えるのかが問題となる。もちろんALTの活用が望ましいが、現在ALTは中・高校でも足りないくらいだから、全国の小学校にALTを回すことはできない。

来年早々には教育課程部会の審議経過報告が出されると思うが、小学校に英語教育を導入するためには、カリキュラム基準の設定、教科書やCD-ROM等の整備、指導者の養成・確保が必要となる。  
(ひしむら・ゆきひこ = (財)学習ソフトウェア情報研究会の理事長)

●最新刊 好評発売中! ● 八尾坂修(九州大学教授)【編】 A5判 230頁 2310円 教育開発研究所・刊

## 『新たな教員評価の導入と展開』

研修誌・図書の小社への直接のお申し込みは無料 FAX 0120-462-488 をご利用ください(24時間受付・即日発送)